

待雪の艦隊

悠久なる旅人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20xx年、突如現れた『深海棲艦』の手によって人類は制海権を失った。

そしてそれから数十年後、人類は『艦娘』の開発に成功した。

艦娘とは、在りし日の艦艇の名を持つ娘たちである。

日本が開発に成功するとドイツ、イタリアも開発に参入した。

そして人類は深海棲艦と交戦を始める。

そんな中とある鎮守府に着任となった照月、しかしその鎮守府は敵泊地のど真ん中にある鎮守府だった。

様々な深海棲艦が襲撃する中照月の行くべき道とは。

目次

着任と衝撃	1
これが、防空駆逐艦の実力です！	
6	
待雪の艦隊	12
危険と隣り合わせ	16

着任と衝撃

「ここが新しい鎮守府・・・緊張してきたなあ・・・」

コンコン

扉の奥から声がする

『どうぞー』

「し、失礼します!」

重厚な木の扉を開ける

「本日からの鎮守府に着任となりました、照月です!よろしく願います!」

「そういえば新しい艦娘が来るって言ってたけど君のことではないのかな?」

ずいぶん明るそうな司令官だなあ・・・

「はい、そうだと思います」

「なるほどね、了解!そういえば鈴谷には会った?」

「鈴谷さんですか・・・いえまだ会ってませんね」

たしか鈴谷さんといえばこの鎮守府では古参だと言っていたような・・・

「おつ、提督、今暇、つて、その子誰?」

「噂をすれば・・・って暇なわけないじゃん、この子は新しく着任した照月だよ」

「ふくんまあよろしくね」

「こつちが古参の鈴谷」

「よっ、よろしくお願いします！」

「古参って言うത്私がおばさんみたいじゃんよ〜とか噂をすればって何さ」

「いやね、一番ここの鎮守府に長くいるから一応挨拶はした方がいいかな〜と思ってさ」

「じゃあそれが私ってこと？」

「そ、そういうかここの雰囲気をもるくした元凶でしょうが」

「あれ？そうだったけ？」

「まあ5年も前のことだしな」

「えっと、話がつかめないんですけど・・・」

「簡単に説明すると、ここの鎮守府が始まったころに着任したのが鈴谷って感じかな？」

「提督、照月ちゃんのこと忘れてない？」

「そうだったね、じゃあ先に部屋の案内と同じ部屋の艦娘へのあいさつかな、」

「はっ、はい！」

「大丈夫、僕も付いて行くし」

「よかったです」

その後提督と一緒に様々な施設や私の部屋、一緒に住む艦娘の皆さんにあいさつに行きました。

ちなみに姉さんもいました。

「これで一通り終わったね、」

「ありがとうございます。」

「じゃあ荷物を置いたら出撃の準備してね」

「えっ？すぐですか？」

「まあこれには訳があつてね、まあそのうち話すよ」

「ちなみにその訳って聞いていいですか？」

「今そのうち話すつて言っただけどなあ・・・」

「でも知りたいんですもん！」

「わかったよ、まあ少しびっくりするかもだけどいい？」

「はい、大丈夫です」

「僕も最初驚いたんだけどねえ・・・」

「ええええええええ!!？」

「声が大きいよ」

「すいません！つい！」

「えっと、どういうことになるんですか？」

「まあ要約するところは敵泊地のど真ん中で、深海棲艦の姫、鬼級が時々この鎮守府を叩きに來るってこと」

「え？さらつといつてますけど大変なことですよね？」

「こんな恐ろしいことをよく落ち着いて話せるなあ・・・」

「そうなんだよねえ・・・なんでこんな所にと思うでしょ？」

「はい、いつたいどうして大本営はこんなところに鎮守府を？」

「その逆なんだよ」

「逆、ですか？」

「そう、先にできたのがこの鎮守府で、その後に深海棲艦がこの近くにとどまったつてこと」

「じゃあ深海棲艦側も想定外なんですね」

「そつ、だからこの鎮守府が邪魔だから攻め込んでくるみたいだね」

「でも、司令官凄く落ち着いてますね、いつ襲ってくるかわからないのに・・・」

「まあね、『怯えていても始まらない、全力で逆らってみろ！』昔の上司にそう言われて

ね」

「それだけで落ち着いているのもすごいですね」

「そうだね、さて！準備できてる？」

「はい！準備はできています！」

これが、防空駆逐艦の実力です!

てーとく「いくら防空駆逐艦と言っても単艦じゃあ心配だし何艦か一緒に行かせるよ」

照月「ありがとうございます！これで安心して撃ち落とせます！」

てーとく「お、おう、頑張ってるね！」（やるとなると意外と怖いな）

出撃直前

てーとく「出撃するまで見送ろうか？」

照月「いえ、大体案内してもらったので場所はわかっています」

てーとく「そっか、頑張ってるね！」

照月「はい！行ってきます！」

とある近海の島周辺

蒼龍「ここは敵の航空戦力が集中してるところだって聞いたんだけど・・・」

伊勢「一応照月ちゃんもいつ敵機が来るかわからないから準備だけはしててね」

照月「はい！」

（まさか蒼龍さんに川内さん、神通さん伊勢さんまで来てくれるなんて・・・）

川内「君つて夜戦は好き？」

照月「へっ？」

川内「じゃあ聞き方を変えよう。夜は好き？」

照月「え、ええまあ・・・」

川内「そつかそつか！君とは気が合いそうだよ！よろしく！」

神通「姉さん、あまり困らせてはいけませんよ」

川内「どういうことさ？」

神通「照月ちゃんも初めてで緊張してるのですから・・・」

蒼龍「彩雲から敵機と敵艦の発見報告！方角は・・・正面！距離は不明！」

伊勢「来たわね！改装された航空戦艦の力見せてあげるわ！」

(伊勢さん頼りになるなあ・・・)

伊勢「敵棲艦の詳細は？」

蒼龍「空母2隻、軽空母2隻、軽巡2隻。空母と軽空母が一隻づつ elite、軽巡は・・・」

伊勢「どうしたの？」

蒼龍「彩雲が撃ち落とされたみたい・・・とりあえず編成だけでも分かったんだし陣形を輪形陣に変更！迎撃準備！」

「「了解!」」

照月「私も頑張らなきゃ!」

照月「対空射撃、展開します!」

慣れた手つきで敵機を撃ち落とす照月

海域中に響き渡る発砲音、それとともに次々と撃ち落とされる敵機。

伊勢「私たちも負けてられないわ!」

伊勢「さて、始めるわよ!水偵、弾着観測お願いね!」

そしてものの数十分で敵艦隊は壊滅。

戦闘は完全勝利で幕を閉じた。

てーとく「まあ、当然の勝利、といったところね」

蒼龍「どうよ?」

伊勢「いつもの調子でやれたみたい?」

てーとく「そして・・・秋月は・・・30機以上撃墜!」

蒼龍「すごい、私の最高撃墜数より上じゃん」

照月「あはは・・・まだ本調子じゃないんですけどね」

てーとく「これで本調子じゃないんだ・・・さすがだね。とりあえず今日はゆっくり

休んでおいてね」

照月「わかりました」

てーとく「明日、艦隊の編成を発表するからね」

照月「はい」

翌日

照月「つさて、いよいよ新しい主力艦隊の発表をします」

てーとく「第一艦隊旗艦、航空母艦翔鶴！」

翔鶴「はい！」

そして、瑞鶴、川内、神通、金剛と発表されていった。

てーとく「そして最後！駆逐艦、照月！」

照月「え？ええええええ!?」

照月「撃墜数があれだけあれば空母の随伴艦も務まるだろうし、今後に期待するとうことで」

翔鶴「おめでどう、照月さん」

瑞鶴「おめでどう！これから一緒に頑張ろうね！」

照月「五航戦のお二人と一緒に嬉しそうですね！」

瑞鶴「やめてよ、照れるじゃん！」

翔鶴「とりあえず『待雪の艦隊』に所属になったら部屋も変わるわね」

照月「あの、『待雪の艦隊』って何ですか?」

瑞鶴「提督が主力艦隊のことをそう呼ぶのがみんなに浸透しちゃったみたい」

瑞鶴「詳しい理由は提督に聞くといいよ」

翔鶴「それでは私たちはあなたの荷物を新しい部屋に運んでおきますね」

照月「よろしくお願いします!」

その一時間後、執務室にて

てーとく「瑞鶴、説明するのめんどくさいから投げたな・・・」

照月「それで、どういう意味なんでしょうか?」

てーとく「ちよつと長くなるけど・・・」

照月「それで主力艦隊は待雪の艦隊、というわけですか。」

てーとく「そういうこと。それじゃあ同じ艦隊のみんなにあいさつに行かないとね。」

照月「それなんです、場所がわからなくて・・・」

てーとく「うん、知ってたよ。」

照月「ううう・・・お恥ずかしい」

てーとく「まあみんな大体最初はそうだから大丈夫!一緒に行くっか」

照月「え、えええ?!いいんですか?ご迷惑じゃ・・・」

てーとく「大丈夫大丈夫！ちようど仕事も終わったし！」

照月「それじゃあお願いします」

てーとく「了解！」

待雪の艦隊

照月「えつと確かここだったような・・・失礼します」

瑞鶴「あつ照月ちゃん！どうだった？提督から聞けた？」

照月「はい、そんな深い理由があつたとは・・・」

瑞鶴「でしょ？私も最初に聞いたときはなに言つてんのかわかんかったけどね！」

翔鶴「その後私が説明したりしたわね」

照月「そつ、あの時も提督の秘書艦は翔鶴姉だったもんね」

翔鶴「そうだったわね。それで照月ちゃんは提督から挨拶して来いと言われたのよね」

照月「そうです・・・つてなんでわかるんですか!？」

翔鶴「秘書艦だから大体言うことはわかるのよ」

(さすが翔鶴さんだなあ・・・私も見習わなきゃ！)

瑞鶴「というか翔鶴姉秘書艦だからじゃなくてただ単にそういうルールだからでしょ？」

翔鶴「ちよつと！言わないでよ！」

瑞鶴「翔鶴姉にもそういうところあるんだ」ニヤニヤ

翔鶴「にやにやするのやめなさい！」

瑞鶴「そつ、それだけでけど、この艦隊に配属になったんならいろいろと忙しくなると
思ってから頑張つてよね！」

照月「提督の言つていた深海棲艦ですか・・・」

瑞鶴「そ、ほぼ毎日のように現れるからね」

照月「どうなってるんですかね・・・そんなに深海棲艦つて出てくるものなんですか
ね」

瑞鶴「まあ実際現れてるからね」

照月「そ、そうですね」

瑞鶴「まあ今日は来ないとは思うんだよねえ」

照月「なぜですか？」

翔鶴「見張りしてる瑞鳳ちゃんの情報機が見に行つたけどそんな感じの動きもなかつた
みたいですし今日は落ち着いていいと思いますよ」

照月「そうなんです、それじゃあ少しいろんなところを見てきます」

瑞鶴「いつてらっしやくい間宮さんがおすすめだよ」

翔鶴「待つて！」

瑞鶴 「どうしたの？ 翔鶴姉」

翔鶴 「偵察機が敵艦隊を発見したそうよ！」

瑞鶴 「嘘!? 少し前の偵察ではそんなもの見えなかったのに！」

翔鶴 「今はそんなことを言ってる場合じゃないわよ！ 私は提督と大淀さんに報告してくるわ！」

瑞鶴 「わかった！ 私はみんなに連絡してくる！」

照月 「わ、私はどうすれば！」

瑞鶴 「照月ちゃんは監視塔に行つて見張りの瑞鳳ちゃんと祥鳳さんに偵察機の増援を要請してきて！ 敵の艦隊の情報が分からないとどうしようもないから！」

照月 「わかりました！」

数分後、鎮守府内に警報が発令された

てーとく 「敵艦隊の詳細は偵察機が調査してくれているから、詳細が分かり次第迎撃艦隊を編成し迎撃を行います」

てーとく 「質問がある人はいる？」

てーとく 「ないみたいだね、それじゃあ指示があるまで寮で待機していて」

「「「「「「はい！」」」」」」」

待雪の艦隊の寮にて

照月「それで結局どんな艦がいたんですか？」

瑞鶴「うーん、瑞鳳ちゃんの情報機が言うには旗艦に空母棲姫がいたそうだよ？」

照月「空母棲姫!？」

瑞鶴「防空駆逐艦の腕の見せ所だね！」

照月「でっでも姫級は初めてです」

瑞鶴「大丈夫！何かあったら私たちが守るから！」

照月「でも、私は護衛艦なのに・・・」

瑞鶴「こういう戦闘は協力なんだから！」

照月「わかりました・・・」

いよいよ始まる鎮守府の防衛線・・・

危険と隣り合わせ

てーとく「瑞鳳の彩雲から詳細が報告されたよ」

てーとく「敵艦隊は旗艦に空母棲姫」

照月「やつぱり嘘じゃないんだ・・・」

てーとく「続けるね、そして空母ヲ級flagship、重巡り級flagship、
駆逐二級後期型、駆逐八級が二隻だそうだよ」

翔鶴「空母棲姫に加えて空母ヲ級flagshipまで・・・航空戦がカギになりそ
うですすね」

てーとく「そうだね、航空戦でこちらの被害が少なければいいんだけど・・・」

瑞鶴「でも撃沈じゃなくて撤退が目的だし大丈夫じゃない？」

照月「え？撃沈が目的じゃないんですか？」

てーとく「そう、あくまで深海棲艦の撤退が目的だから無理に沈める必要もないし、そ
れに・・・」

瑞鶴「沈めたくないでしょ？」

てーとく「まあそれが一番かな・・・」

提督は深海棲艦もできれば助けたいのかな？

照月「では迎撃艦隊の編成は？」

てーとく「そうだったねこちらの編成は榛名旗艦に、霧島、赤城、翔鶴、瑞鶴、そして防空枠として摩耶」

てーとく「一回空母棲姫のいる海域に突撃した時の編成を参考にしてみたんだ」

てーとく「照月は対空地は高いけどまだまだ練度的にも不安があるから今回は摩耶に任せるよ」

照月「わかりました」

瑞鶴「大丈夫！練度が上がれば逆に選ばれなくなるぐらい出撃があるから！」

照月「そうですね・・・」

てーとく「今回照月は大淀と一緒に通信の方をやってくれる？」

照月「了解しました！」

てーとく「それじゃあ出撃する艦隊を除いて部屋に戻って！」

てーとく「今回はごめんね？」

照月「いえ、まだ私自身も実力が及ばないことはわかっていたので」

てーとく「じゃあ明日から演習にも行ってみるかそうすれば練度の上昇も図れるし

「え」

照月「わかりました。じゃあ明日からですか？」

てーとく「そうなるね、大丈夫そう？」

照月「大丈夫です！」

てーとく「そっか、それじゃあ頑張ってね！」

照月「それって今応援するんですか？」

てーとく「あつ、そうだったね、つい」

提督「って意外と天然なのかも？」

てーとく「それより通信の方法はわかる？」

照月「大体はわかります」

てーとく「大体は僕が指示する指令を艦隊に伝えてくれれば大丈夫だから」

照月「わかりました、それで指令室は？」

てーとく「ここだけど？」

照月「あ、あれ？ここって・・・」

てーとく「そう、執務室、部屋数が足りないんだとよ・・・」

照月「災難ですね・・・」

てーとく「ホントだよね、なんて言っつてられないよね」

大淀「提督、艦隊が出撃しました。指示をお願いします・・・あら？その子は」

てーとく「新しく着任した照月だ、今回は大淀の補佐をやってもらおう」

大淀「ああ、新しく入った駆逐艦の子ですね、よろしくね」

照月「よっ、よろしくお願ひします！」